

【本文】

世の人の心惑はすこと、色欲にはしかず。人の心はおろかなるものかな。

匂ひなどは仮のものなるに、しばらく衣装に薰き物すと知りながら、えならぬ匂ひには、必ず心ときめきするものなり。

久米の仙人の、物洗ふ女の脛のしろきを見て通を失ひけむは、まことに手足肌などの清らに肥え脂づきたらむは、外の色ならねば、さもあらむかし。

【読解】

色欲にはしかず …… 色欲に (

※AはBに如かず …… AはBに及ばない
Bに如かず …… Bに及ぶものはない

世の中で一番人を惑わせるもの 〓 〓

【 〓 〓 仮のもの

■例 衣装に 【

理屈ではわかっている！ けれど……

【 〓 〓 には 必ず 【

○兼好法師の人間味

*久米の仙人の例

仙人……俗世間を離れて深い山奥に住んでいる。不老不死の法、変幻自在の術を得ている。



『今昔物語集』卷十一

このあと、この女と夫婦になる

〈兼好〉
さもあらむかし